

第5回八王子市歴史遺産活用検討会

議事録

(発言者 敬称略)

日時 令和元年5月27日(月)午後6:30～8:30
場所 八王子市学園都市センター 第1セミナー室

1. 開会

- 市 4月に人事異動があり、小山が生涯学習スポーツ部長に、菅野が文化財課長となった。
- 市 5月1日に元号が変わって1か月が経つ。5月20日、今年度の日本遺産16件が認定されて累積83件となり、最後の認定まで残すところあと1年となった。東京都からは台東区や江東区が他県自治体とのシリアル型で申請したが、いずれも認定に至らず、日本遺産がない都道府県は東京都だけとなった。しっかり検討して日本遺産認定に結び付けたい。
- 市民の皆様と検討して八王子市の歴史文化資源をまちづくりに活用できるということは意味が大きい。本検討会において、いただいたご意見は、歴文構想に反映するとともに日本遺産のストーリーの参考にさせていただきたく、今回も忌憚なくご意見いただきたい。
- 市 八王子城跡から、横浜から埼玉まで一望できる景観を見て、昔のことに思いを馳せ、このような歴史文化を大事にしていきたいと感じている。
- 市 事務局職員について、金子に代わり、久田、山本が加わった。
- 市 前回検討会の歴史文化基本構想は、素案のイメージとして非常に粗い状態で示した。今後、7月の検討会を経て素案をつくり、庁内の手続きを進めて、10月頃にパブコメを行って市民からの意見を取り入れるというスケジュールで進めていきたい。今回は素案に近い形だが、まだ粗い部分もあるため、ある程度大局的な視点でご覧いただき、専門的な立場から忌憚なく意見をいただければと思う。

2. 検討事項

(1) 八王子市歴史文化基本構想について

- 市 前回検討会でのご意見を踏まえ、事務局で内容の精査を進め、なるべく素案に近い形で示している。細部に入る前に、表紙の次にあるA4横ページの構成イメージをご覧いただきたい。前回の議論を受けて全体の構成を見直してみた。イメージの左側が前段である1章から4章まで、真ん中が5章、右側が後段である6章以降という構成を考えている。1章、2章では、「歴史文化資源の総合的な把握」として、八王子の歴史を通史的にまとめている。「歴史文化資源データベース」は、本編に細かく記載するものではなく資料編に載せるもので、八王子市の歴史文化資源を分析するうえで根拠

になるデータを構築しているところ。その次の「10 地区ごとに整理・分析」は、合併前の 10 町村単位で歴史文化の特徴を分析・整理するパートで、これを担うのが 3 章。ここまでが八王子の概要、特に通史的な概要、歴史文化の特徴を書く部分。すべての要素を網羅的にピックアップすることは出来ないが、将来的な保存活用を見据えて項目の取捨選択をしている。書き方のスタンスとしては、史実をしっかり積み上げて書き進めている。史実の確認を進めている段階の表現もあるので、気になる箇所は多々あるかと思うが、検討会委員の皆様にも個別に細かくチェックしていただく機会を設けたいと考えており、本日は大枠の部分を議論いただきたい。

4 章では「八王子の歴史文化の際立った特徴」ということで、10 の関連文化財群をまとめている。八王子の歴史文化の魅力を発信していくということで、市民にも興味を持ってもらえるように、諸説ある中での興味深いエピソードや、一部の地域で伝わっていること、こんなことが考えられるのではないかということも含めた形で読んでいただけるようなものを考えている。群の捉え方や内容の表現についても、大きな視点で気になるところがあればご意見いただきたい。

93 ページ「八王子市の歴史文化の特徴」は、92 ページ以前で 10 地区の歴史文化の特徴についてキーワード出しをして特徴を捉えており、95 ページの 4 章以降で関連文化財群として歴史文化をエピソード的、ストーリー的にまとめているが、そのつなぎの部分にあたる。

前段の 4 章までで八王子の歴史文化の特徴を整理しており、5 章から、それを実際にどう保存・活用していくかということをもとめている。

まずは、5 章で歴史文化の保存と活用について現状と課題の整理をしている。現状と課題を踏まえて、保存・活用に向けてどのような考え方を据えていくのかということをも 176 ページ、177 ページに基本理念として整理している。文化財をしっかり保存・活用して、歴史文化を活かしたまちづくりにつなげていくという基本的な方向性を示したうえで、具体的な取り組みの方針をまとめている。

6 章では、4 章で示した関連文化財群をどのように活用していくのかということと、群を踏まえて歴史文化を特に保存・活用していく区域を定めていく考え方をまとめている。186 ページ、187 ページに保存活用区域の図を示している。続いて「地域の歴史文化資源の保存活用の推進」ということで、市独自の取り組みとして、市民が大切にしている資源をどのように位置づけ、どのように守っていくかという考え方を示している。

7 章は、保存・活用に向けた体制整備について書いており、どのような仕組みによって保存・活用を進めていくか具体的に書き進めている。将来に向けた体制づくりを視野にしっかり書きたい。

8 章「今後の取り組みに向けて」は、分量的には少ない状況だが、構想を活かして将来に向けて取り組んでいく内容をここで整理していきたい。

本日の机上配布資料の通り、歴文構想は法律上特に位置づけがなされていないが、文化財保護法の改正により、歴文構想を発展させた文化財保存活用地域計画の策定が努力義務となった。八王子市では、歴文構想をまずしっかり仕上げたうえで、その後すぐに地域計画を策定することを考えている。地域計画では、5年、10年など計画期間を定めて、短期的・中期的・長期的にどのようなことを具体的に行っていくかを定める必要があり、より実効性のある計画にシフトしていくことになる。

歴文構想の後段については、今後の活用の方向性の大枠についてご意見をいただければと思う。

文化財指定という行政の従来取組に加え、文化財登録制度の整備も念頭において取組を進めたい。6章の説明でも申し上げた通り、市民の間で大切にされている物を認定していくような市独自の制度も考えられたらと思っている。

- 市 76 ページの基本理念は、「わたしたちが守り育てるみんなのふるさと八王子」を基本理念として掲げ、これを補足する文章を下に続けている。基本理念については、歴文構想で目指すところをしっかりと表現したいため、事務局である程度固めたものとしてお示ししているところだが、こちらについてもご意見、ご感想をいただければと思う。
- ・ 61 ページ3章の構成について。「1. 八王子の歴史文化の捉え方」「2. 八王子市の歴史文化の特徴」という流れになっているが、1と2の順序が逆で、1は2の細目として位置づけるのが通常考え方だと思う。この構成はどのような考え方によるものか。
- 市 歴史文化についてはその背景もしっかり捉えていくことが大切だと考えている。その歴史文化資源に対する基本的な考え方は、43 ページに記載している歴史文化資源のイメージ図の通り、まず文化財保護法における文化財の枠で捉えて、それをさらに広げる段階として、文化財の周辺環境まで広く捉えるというもの。その考え方をベースに、61 ページからの「1. 八王子の歴史文化の捉え方」では八王子の地理や自然に関する要素との結びつきから考察している。続いて、10 地区ごとに、歴史文化資源の周辺環境を含めて特徴を描き出すため、キーワードを抽出している。これを踏まえて、93 ページの「2. 八王子市の歴史文化の特徴」で9の特徴を挙げているという流れ。- ・ 説明の順序も分かるが、一般論としては、3 章が「八王子の歴史文化の特徴」というタイトルであるならば、最初に特徴を定義し、その後に詳細を分析するのではないかと思う。また、一番重要な「2. 八王子市の歴史文化の特徴」が半ページで終わっているのは問題だと思う。付け足しのように見えるし、もっとインパクトを与えるためにはやはり冒頭に置いたほうが良いのでは。

市 「1. 八王子の歴史文化の捉え方」「2. 八王子市の歴史文化の特徴」の順番については検討させていただきたい。「2. 八王子市の歴史文化の特徴」については、10 地区の特徴を捉えてそれを総括し、4 章の関連文化財群につなげていく位置づけのパート。分量については現状少ないが今後補足していく。また、「1. 八王子の歴史文化の捉え方」「2. 八王子市の歴史文化の特徴」の表現がほぼ同じ意味合いに見える

感じた。

- ・ 歴史文書の構成イメージについて、矢印の流れの中では「八王子の歴史文化の際立った特徴」の記述が気になる。「10 地区ごとに整理・分析」という部分で各地区について取り上げ、「八王子の歴史文化の際立った特徴」をまとめて、次の第 4 章の物語（はちおうじ物語）につなげているが、この部分が薄い。10 地区から抽出したものについて一つずつ具体例を挙げてから特徴を導き出さないと、「八王子の歴史文化の際立った特徴」は単なる前書きに過ぎないものになる。そのあたりが物足りないということではないか。際立った特徴といっても半ページしかないうえ、書かれている内容もどこの市町村でも言えるような内容が多い。たとえば八王子城を犬山城に書き替えても、使いまわせるような文章になっている。せっかく 10 地区を解説してきたのに、これでは読者が肩透かしを食らった気持ちになるのでは。養蚕や里山にみる自然との共生、近代化などはどこの地域にもあること。高尾山の自然は、高尾山自体は八王子だけだが、ほかの山を対象とした信仰はどこにでもあり、これらは八王子の特徴ではない。この部分をより具体的に、ボリュームを持って書き込んでいかないと、むしろ掲載しないほうが良いということになる。

また、合併前の 10 地区という区分をベースに書いているが、歴史的特徴を抽出するのであれば、旧宿場町や農村地域、また山間部や新田地域など歴史的な成り立ちを踏まえた区分で捉えていくほうが、特徴も抽出しやすい。行政的に合併前の地域をベースにする必要があるなど事情があるのだと思うが、特徴出しが難しくなる。たとえば由木と由井は非常に特徴が似ていたりする。また、各地区の特徴をキーワードとして出していくのも良いが、この地区はこのような特徴があるという小括を設けると特徴を表現しやすいのでは。

それから、新住民も多く自分の地区以外がよく分からないことが考えられるので、各地区の冒頭にある地図では、地区名だけでなく通し番号も振った方が分かりやすい。

- 市 地区の括り方はいろいろ考え方があると思う。八王子の歴史を踏まえて括る視点は大事で、ただ、実際の活用の場面においてどのような単位で捉えるとスムーズかということも考えさせていただいた。地理的な一定の地域のまとまりとしてワークショップを重ねてきたこともあるが、今後地域ごとに実際の活用や活動につなげていく際の単位として、合併前のまとまりを一つの考え方として採用している。ただ、より明確に八王子の特徴を捉えるために別の括り方で説明を入れていく方法もある。

- ・ 八王子の市域の形成過程を具体的に示す文化財やそれに類するものについて、ある地域からほかの地域に移動しているようなものもある。そのあたりをフォローできるようにしていかないと、移動してきていても初めからその地域にあったと誤解する人もいられるのでは。たとえば直入院石造五智如来立像や大善寺など。八王子宿の成り立ちにどうしても欠かせないものは相当周辺に移動している。特に新住民はそのあたりが分からないと思うので、今大切にしていることにも触れつつ、元にあった場所へ戻して

俯瞰するという作業も必要では。

- 市 ワークショップでもかなり挙がった意見ではある。ただ、移動した先の地域で非常に大切にされているという意見もあり、私どもも扱い方に悩んでいる。
- ・ もともと本郷村の多賀神社の参道部分にあった車地蔵がめじろ台に移転したケースもある。そのようなものを丹念に拾いこんでいく必要がある。
- 市 たとえば、大善寺のお十夜のエピソードは、69 ページ「小宮の信仰と伝統文化」に掲載しているように移動先の小宮地区で大切にされているものとして取り上げている。いま大切にされている地区でも、もと存在していた地区でも、触れていきたい。
- ・ 60 ページ「データベースからみた地区別の特徴」の一覧表について。もう少し大きくして、マトリクスで表現すると分かりやすいのでは。例えば表頭に「城跡」「寺社」など並べて、表側に各地区を並べるなど。縦串の見方が出来るので、より分かりやすい。
- 市 資料編 207 ページから、「地区別マトリクス図」として、地区ごとに時代と分類を組み合わせたマトリクスがあるが、地区ごとに見えてくる特徴もまとめている。これをベースに抽出した要素を見せてはどうかと考えて、60 ページの表に落ち着いた。マトリクスのほうが見やすいということであれば再検討したい。
- ・ 207 ページのマトリクスを集約したものが 60 ページの表であることは理解したが、60 ページも 207 ページも情報が多く読みにくいので、市民がぱっと見て分かるようにマトリクスなど表現の工夫をされるといかがかと思う。
- 市 207 ページはイメージの状態で、事務局のメモが残っているが無視していただきたい。
- 市 移動した資源もマトリクスでうまく表現したい。
- 市 全体の話をする、歴史文構想は冊子を作って終わりではなく事業に活用していくためのもの。市民の皆様に分かりやすくするため八王子の歴史文化を全部盛り込むことは出来ないが、歴史文構想に書ききれない内容はこれまでのように文化財行政として継続的に発信を行っていく。
- ・ 3 章について、外部の視点で見ると、いろいろな指定文化財をただ自然発生的に並べているだけのようで、構造が見えない。構造とは、八王子の特徴を語る際に、外部環境がどのように変わってきて、その中で八王子がどのように適応したか、適応しなかったか、あるいは、生業がどのように変わってきて、その中でどのような文化財や産業が生まれてきたか、というストーリー。
- 現状では、地区ごとにどのような文化財があるということは分かるが、特徴は少し分かりづらい。むしろ、特徴を描くつもりで文化財を抽出していないと思った。10 地区を合計すると八王子の特徴になるわけではなく、10 地区の特徴とは別のランクで八王子全体の特徴がある。
- 93 ページ「2. 八王子市の歴史文化の特徴」は次の 10 のストーリーにつなぐ位置づけということだが、この 10 のストーリーだと、近現代があまりに薄く、八王子の特

徴を表現しきれない印象。後段の活用の話までつないでいくことを考えると、どのストーリーも江戸時代までで終わっているのも、活用のしようがないと感じた。

国交省で「かわまちづくり」の選定に携わっているが、体験ツアーをやるということを見ても現代的に見た時に、船はどのようなものだったのか、商いはどのような物流で取引していたのかなど、商業の流れがどうなっていたのか、生業の変化がどうなっていたのか、近代でどのように変わってきたのかという構造が分かったうえで、そこに文化財を位置づけるようにしないと、ストーリーは作れないのではないかと感じた。

私はよく地方の川で堤など見せてもらうが、ただ古いということだけでなく、どのように利活用されてきたかということや、地元の人々が今もそれを守っているということを知っていて、それなら大事なものだとも理解できるが、それがないとただの文化財カタログにしかない。

4章で近現代も厚くできないか。

市 具体的にはどのような内容か。

- ・ 吉田初三郎の絵図が資料に含まれているが、大正期から始まった郊外観光地の流れがある。八王子にはたくさん杉があるものの、先日行ってきた宮崎県にも飢肥杉などたくさん杉があり、宗教的に意味があることなど、高尾山の杉の優位性を表現しなければならない。そうすると、高尾山に話を導くのであれば、大正期以降の郊外観光地の流れは見逃さず。もうひとつは、八王子の産業として桑都は重要なポイントであるのに、この点を描いた近現代のストーリーが書かれていない。このストーリーがないと、今後、のこぎり屋根の建物をユニークベニューとして活用できる可能性があるが、八王子にそのような建物があるという情報が届かないということになりかねない。

市 93ページ「2. 八王子市の歴史文化の特徴」で、江戸時代あるいは中世の話として触れている。93ページは時代が止まった特徴としての捉え方。関連文化財群の基本的な考え方としては、それぞれの特徴が今の八王子にどのようにつながっているかを描きたい。121ページ以降の「桑都八王子は織物のまち」では、江戸時代に養蚕が盛んだったことを書いているが、124ページでは織物のまちから現代の八王子の先端産業として集積してきたことに触れ、過去の産業が今に息づいているということで、全体にわたって現在の八王子につながるような構成としている。124ページでは「今も残る桑都八王子の“おもかげ”」として、のこぎり屋根など現在感じられるものを載せている。126ページでは、今八王子で行われている保存・活用している事例を紹介している。高尾山についても、近現代の観光化やレジャーの話は興味深い。日本遺産にもつながる部分であるが、近代の話も含めていくと魅力的になると考えている。高尾山の魅力を語るなかで、ひとつの物語として挿入する考え方もある。高尾山の捉え方は日本遺産との関係で変わってくるところもあるかもしれない。138ページでは、幕末以降の観光地としての高尾山のことを書いている。

- ・ 44ページ「歴史文化資源の分類」に口承記録がない。聞き書きして残していかないと

後世に残らないので、それを示していただくと、より活動が活発化するのでは。

もうひとつは、物語7で里山に言及しているので、八王子郊外のことを考えると多摩ニュータウンを載せたほうが良いのでは。多摩ニュータウンを正面から捉えるのではなく、たとえば里山と共存した郊外を作ってきたということ、あるいは自然との共存に努力されてきたということにつなげる視点もあるのでは。今につながる話でないと、昔のこととして若い方々は興味をなくす。今につながるような丹念なストーリーをお願いしたい。

市 歴文構想で多摩ニュータウンや八王子ニュータウンをどのように描くかは、非常に大事な視点と考えている。98ページ「豊かな自然が人々を呼び寄せる」に、八王子で一番古い遺跡が多摩ニュータウンで見つかったことを書いている。

- ・ むしろ、東京の高度成長を支えたのが多摩ニュータウンだったなどの書き方をしないと伝わりきらないのでは。バッファが必要なのであれば里山というコンセプトを挟む。

市 非常に住みやすい環境であったことも全体の中で表現できればと思う。

- ・ 先ほど10地区の分け方について議論があったが、新八王子市史の自然編を出版した際に、八王子の植物の地区ごとの特徴をどのように表現するか悩み、結局、山地の植物、丘陵地の植物、川沿いの低地の植物という3パートに分けて解説した。歴文構想で10地区を採用することになるとしても、恩方など山の文化がある地区、加住丘陵や多摩丘陵など丘陵地、中心市街地など低地エリアといった括りで、地勢と10地区の流れを出来るだけ同期させる工夫が出来ると良い。

多摩ニュータウンについてももう少し触れていただいたほうが、由木地区は広がりができる。

全体的に、章ごとにまだまだ素案ということもあると思うが、たとえば1章「八王子の概要」は中学や高校の副読本をコピペしてきたように見えてしまう。さらっと読んでしまう部分ではなく、八王子ってこんなところだったのかと改めて発見があるような書き方をしたほうが良いと思う。私は自然史の立場だが、自然環境のパートは通り一遍で、動植物相のパートは動物相と植物相で1ページずつしか割り当てられていない。災害のパートのほうがはるかにページも多く、このパートにどれほど重みを置くか疑問に思う。

市 ボリューム感については、肉付けの仕方を検討したい。災害については、人の命が大切ということもあるが、昨今災害が続いているなかで文化財が災害によって失われている。歴史を語るなかで、災害を語るということは比較的弱い部分だったが、文化財を災害からどう守るかという点で喫緊の課題と考えている。

- ・ 災害への対応方法自体が文化でもある。水害なら、水害にどのように対応してきたかという点に特徴が出る。あるいは、土砂災害にどのように対応してきたか、どのような場所に文化財があるのかなどが全部つながる観点が必要なのでは。
- ・ 歴史の記述について、指摘があったように小中学校の副読本的で、読んでいてどこか

で読んだ文章だなと思う部分がある。後々問題になりかねないので、出典を明らかにする必要がある。また、「八王子城落城はわずか一日で落城した」「甲州街道はわずか三藩しか使わなかった」など八王子の人ではない人が書いたと思われるような文章をそのまま使っているような箇所もあり、八王子の文化財として大事にしていきましょうという「歴史文化構想」の記述なのだから、わざわざ貶める必要はない。

市民が読んでわかるかということと言うと、つぎはぎの文章になっており、主語と述語が対応していなかったり、前後で用語の統一が図れていない箇所があったりする。また、最近著作権の問題がかなり厳しいが、写真の使用許可の問題もある。市史の場合も、許可を得るのに半年ほどかかったので、早めに準備していく必要がある。

町田の資料館で八王子千人同心に関する展示を行っているが、資料館に取材した新聞社が出した記事に史実と異なる内容があり、資料館がホームページにお詫びを掲載していた。そのようなことが起きないように、分かりやすさは重要だが大前提として史実に正確であることが必要なので、慎重に進めてほしい。

- ・ 出典を括弧書きで明記するのは基本。
 - ・ 天然記念物を紹介するページが見当たらない。どこかで触れないのか。
- 市 資料編では天然記念物も掲載する。各地区の特徴の構成要素として挙げれば本編にも載せる。
- ・ 地域で括ると、地域をまたいで共通する資源はあちこちのページに載せなければならなくなる。天然記念物で括るのもありだと思う。
 - ・ 足利市の歴史文化基本構想は 10 年かけて策定されたが、八王子の場合は大急ぎで進めている感があり、それがコピペのように見えるという意見につながっている。ひとつひとつ精査する余裕がないのかなと思った。

また、文化庁の歴史文化基本構想策定技術指針を確認したが、他の施策との連携として、まちづくりや自然保護、緑地保全地区などの部署、文化財保護審議委員会との調整をパブコメ前に行っておく必要があるのでは。

策定技術指針に歴史文化基本構想策定見直しについて記載があるが、この内容も踏まえて進めていくのが良いだろう。

また、多くの自治体において同様とを感じるが、歴史文化基本構想の中に、保存と活用のことはたくさん出てくるが、継続的な調査について記載がない。基本理念の次ページ 177 ページ「歴史文化を活かしたまちづくり」の中に調査の視点がない。近代の建造物、元本郷の浄水場の建物なども、文化財として指定や登録まではされないとしても、八王子にとってとても重要なものだと思うので、そのようなものを今後活かしていくために調査の視点を入れることが出来ないか。古くから注目されている文化財がある一方で、道標など注目されないものもたくさんある。そのようなものにしても、劣化していたり道路工事で移動されてしまったり、現状把握が出来ていない部分があり、このような課題を基本理念や基本方針で踏まえていただけないか。

市 179 ページの基本方針の中で、調査は方向性として示しているところだが、あわせて、継続的な調査や、具体的にどのようなものを対象として捉えていくかについても示すようにしたい。

歴文構想の見直しについては、地域計画が法律上位置づけられたため、基本的にはこれに歴文構想の考え方をまとめ、歴文構想を改定していくのではなく、地域計画を今後定期的に改定していくように考えている。

継続的な調査が必要という考え方は、基本方針や 8 章「今後の取組に向けて」で分量的にももっと肉付けしていく。

現状については、日本遺産申請の関係で歴文構想検討もかなりタイトなスケジュールで進めているのは確か。ただ、基本的なスタンスとしては、10 年にわたり編さんしてきた市史を受ける形で作成を進めているところ。ただ、切り貼り感のある文章は良くないので、しっかり意識していきたい。

- ・ 石碑についても、八王子の場合は市として悉皆調査を行っていない。構想の中で具体的なスケジュールを入れていったほうが良いと思う。

市 取りまとめは市が行うとしても、行政以外にも地域や学校教育の中で地域の調査を担ってもらえるのも良いと思う。行政が行う部分と地域と一緒にやる部分も、構想の中でしっかり書いていきたい。

基本理念については、ある程度固まったものとしてお示したところだが、すべての方がすっきりする表現は難しいものの、出来るだけ皆様の思いを盛り込みたい。

- ・ 102 ページ「主な文化財保存・活用事例」に郷土資料館が入っているが、古代の遺跡に関する内容だけを取り扱っているように見えるので不適切。郷土資料館は、物語 1 から 10 まですべてに関わるものなので、全体を通しての活用事例として入れるのが望ましい。

114 ページには事例として「平成の下原刀を高尾山に奉納する会」が挙げられているが、継続的に活動していくのか疑問で、そうでないならば載せなくて良いと思う。また、私自身はこの刀は下原刀ではないと思っていることもあり、ここに載せてしまうと市が公認したと捉えられかねない。逆に、ここにガイダンス施設が挙げられていないので、こちらを入れたほうが良いのでは。

145 ページ下部に「まじない食」という聞きなれない言葉がある。知らなかったので調べたが、たった一人の人がある本にこの用語を定義して用いているだけで、それ以外の情報は何もヒットしない。学会ではまったく通用していないし、知らない人がほとんどで、歴文構想に載せて市民に広げるのは不適切では。これから出版が始まる日本の食文化に関する叢書では、神に供える神饌、神とともに食べるもの、儀礼に際して食べるもの、タブーや食べ合わせなど、食に関する信仰と習俗を多岐にわたって論じることになっている。それをまじない食と一括りにすると、食文化の多様性を見失うことになるので、やめた方がよい。通説になっているのであれば良いが、歴文構想

に載せてしまうには時期尚早なのでは。

- 市 根拠などを精査し、しっかり整理していきたい。まじない食という言葉をここで打ち出していこうという意識はなく、神に供える大切な行為として記載した。
- ・ 専門家でなく食レポーターが定義しているので、慎重に扱うべき。
- 市 下原刀についても、市として認可していくということではない。過去にあったものをどのような形であれ復元させようとした試みが重要と捉え、事例として挙げた。活動を継続するかどうかは確認する。
- ・ 下原刀の事例は、テレビ番組の取材依頼があったものの下原刀でないということで番組取材を取りやめたことがあった。市が『下原刀復活』というお墨付きを与えたと見られるのは良くない。
- 市 写真の使用は許可をしっかりとる。他の施策との関係性についてもパブコメまでには各所管と調整をしっかりとっていく。
- 今回は、検討会前の出来るだけ早い段階で資料を配布して、読みこんでいただく時間をとりたい。

(2) 日本遺産認定ストーリーについて

- 市 5月20日に今年度の日本遺産が発表された。八王子は来年1～2月の申請に向けて磨いていくという状況。前回検討会では4案ご提示し、いただいたご意見をもとに今回3案に仕立てた。A案は、前回のA案にインバウンド、近代の観光地化、外国人遊歩といった要素を盛り込んだもの。B案は、山岳信仰や祈りの山といった視点で前回ご提示した案をさらに進めたもの。C案は、都市構造を俯瞰する視点で前回ご提示した案をさらに進めたもの。いずれも、実際に申請時に用いる様式1-1、様式2に当てはめてご提示している。このほか様式3-1もあるが、これはC案のみに付している。さらに、構成文化財の写真を並べた様式も必要となる。
- 今回新たに発表された16件についても、申請タイトルと概要、写真が公開されているので、参考資料として配布した。例年、配布した以外の様式も追って公開される。
- 市 1か所訂正がある。A案の様式2で、1項目目の「初めて外国人が八王子にやってきたのは幕末のことである」は適切でないので、一文削除をお願いしたい。
- 市 いずれの案も、高尾山を主軸に据えつつ、国指定文化財を盛り込むことが必須なので、北條氏照や八王子城跡も盛り込んでいく。なるべく近代に近いところまで通史的に語っている。また、歴史に興味がない人でも興味を持てることも、審査上大事なポイント。
- ・ A案の様式2について、シュリーマンが八王子の養蚕について言及した記録や、アーネスト・サトウに関するエピソードなど、市民も知らない興味深い内容が盛り込まれていると感じた。これらインバウンドの視点は、ストーリー概要(様式1-1)に盛り込むことは難しいか。

- 市 技術的には難しいことではなく、反映させた記述は出来ると思う。
- ・ 「ラッキーマウンテン」「幸福」という表現には違和感がある。幸福を求めて来るといふ点がしっくりこない。ある程度キャッチーさやインパクトがあるのが良いので難しいと思うが、タイトル案を再考されてみてはいかがか。
- 市 これらの表現をタイトルに用いるかも含めて十分に議論しないといけないと思う。ラッキーという表現は、ミシュランの選定理由の中に幸運“lucky”を求めて人々が訪れるという記述を見つけて用いたもの。内部でも、違和感があるという指摘や、ラッキーという言葉に他力本願のようなニュアンスを感じるという意見も出ている。
- ・ A案は、観光的な視点で非常にイメージしやすい。「守る」という部分に関して、様式2の2項目の最後の段落で、どのように守ってきたかという記述が見える。それが現代にどのようにつながっているのか、現代の人たちはご利益を求め一方で高尾山を守っているのか、どのように守っているのか、という点が示せると、ぐっと映えると思う。
- 市 4項目目で、ごみやマナーの問題に取り組んだことに触れている。市民が高尾山の美化運動に取り組むことも「守る」のひとつのあり方。また、杉苗奉納も高尾山に独特の風習であるが、願いがかなった後に奉納するという行為が現在の「守る」のあり方と捉えている。
- ・ その点がもっと打ち出せると良い。マナー改善の話は、マイナスであったものを引き上げたに過ぎないので、もっと文化につながる特徴が出てくると良いと思う。杉苗奉納の話は良いと思う。
- A案様式2の最後の一文「～幸運の“おやま”なのである」という表現は、なんとなくインパクトがない印象。高尾山はこのようなシンボリックな意味を持っているから守られてきた、ということメッセージとして示せる表現があれば望ましい。
- 市 B案は、高尾山薬王院の方にヒアリングした内容がベースになっている。基本的なストーリーの目線は、自分が登って感じる事。また、高尾山はリピーターが多く、一度行ったらもう行かないというような観光地ではない側面を捉えている。
- C案では、都心からの近さがミシュラン採択理由のひとつではあるが、アクセスの良さだけではストーリーにならないので、これを精神的な近さと読み替えたもの。
- ・ C案の「ウラヤマ」はどのような意味か。江戸・東京から近いところにあるという発想か。
- 市 小学生が学校の裏山に行くような感覚を都市のスケール感に置き換えたもの。
- ・ C案に「里山」とあるが「奥山」のほうが適当では。
 - ・ 地形について言うと、分水嶺にあたり、裏山という表現はどうかと思う。
- 市 アクセスの良さを表現するため、「奥山」の奥深さのニュアンスと区別したかった。
- ・ 「ウラヤマ」という表現が、「聖と俗が交錯する」こととうまくフィットするか。裏山は、遊ぶところという感覚。

- ・ A案の様式2で、2項目目末尾の守られてきた話と、3項目目の一大観光地の話がぶつ切りでつながらない印象。両者をつなぐ、近世から近代にかけての講中の話が出てきていない。講中自体は都内や横浜にもあるが、それを踏まえたほうが、ストーリーがつながる印象。

八王子では、これまで小学校1年生から6年生まで、遠足の行き先が高尾山が多い。今も小学生はやはり遠足で行くし、多くの登山客で賑わっているということは、それだけ身近な存在であるということだと感じている。このニュアンスを出せると良いと思う。

市 それを表現したくて用いた表現が裏山だった。うまく表現できれば良いが。

市 以前、事務局でも遠足に言及したストーリーづくりを試みた。

- ・ 高尾山で「〇〇一」と言われるものを挙げると、登山客数が世界一、ケーブルカーの最大斜度が日本一、これは言い切れない部分もあるが植生の豊かさが日本一などある。ストーリーの認定基準にも稀少性があり、他の日本遺産を見ても「日本でここだけ」「日本で最初」といった表現が見られるので、そのような表現を増やしてみるのも認定のポイントになるのではないかと思う。ミシュランに選ばれたことは多くの方が知っているので、そうでないところも取り上げられると良い。

また、高尾山の下にある蕎麦屋では基本的にとろろそばを出すという点は、山に登る人のために滋養強壮、体調を整えることが意識されている点が特徴的。

- ・ 植物は1600種あるとストーリーに記述があるが、以前放送されたテレビ番組で地元の先生が話したのは、イギリス国土に生えている植物よりも高尾山に生えている植物のほうが、種類が多いということだった。地域を広げて捉えた種も含めてではあるが、とても分かりやすくインパクトが強い。

また、山を守るという視点はすべてのストーリーに共通するが、ごみ持ち帰りに関して、御霊谷林道で佐川急便が森の手入れをしていたり、「東京マラソンの森(公益財団法人東京都農林水産振興財団)」にも企業が入って手入れしていたりという事例があるので、こうした活動風景など、企業協賛で取り組んでいる絵柄を持ってくるのもひとつの案。

- ・ 日本遺産認定のポイントは、ストーリー展開に文化財が無理なくきちっと位置づけられて、文化財が生きているかどうか。このストーリーなのにこの文化財が入るのかとか、この文化財なのにこのストーリーなのかという違和感があると、うまく審査員に訴えられないようだ。きちっとその文化財の良さを訴える視点が重要では。

構想について、おそらく検討会の各委員が一番気にしていたのは、93ページの歴史文化の特徴の部分。10地区の共通点だけでまとめてしまっている。その前の地区ごとの記述も、統計的に一番数が多いものを特徴として抽出している印象。地区ごとにストーリーがあって、八王子全域の中で時代によって光る地区の流れがある。文化財に注目するあまり、モノを注視した説明になっている印象で、それぞれの地区の流れ、あ

るいは地区と地区の間のモノの流れが見えなくなっている。点ではなく、もう少し線として描けないか。

そう考えると、歴文構想の資料編で、指定文化財が羅列されているが、文化財行政というものは扱いやすいものから指定している傾向がある。地域のストーリーを考えて指定しているわけではない。必ずしも文化財指定の分布が年代的、地域的に八王子市を代表するように指定できていないということもある。とすると、今回の策定作業を通じてまだ文化財行政で取り上げられていない領域が見えてくるのでは。そうすれば、未来の八王子に伝えなくてはならないものが何で、そのために何を調査しなければならないかが見えてくる。指定文化財が少ない地域は、調査を行っていないだけ。天然記念物にしても、植物だけでなく、本当は動物、地質鉱物も含まれて良いはず。

- ・ 過去の文化財行政には哲学がない。哲学を持って文化財を選定するという作業は積み上げられていない。今回の構想をきっかけに、ぜひそのような思考を根付かせたい。
- ・ 今後のロードマップになっていくような構想になればありがたい。これからの文化財行政は、地域のストーリーを踏まえたものにしていく必要がある。多摩ニュータウンに縄文遺跡が残っていたのは、八王子市街はもっと以前から改変されていた一方で、多摩ニュータウンが近代まで改変されてこなかったから。多摩ニュータウンは、森を切り崩さないと言街を作れないという発想をやめて、丘陵の地形を生かしたまま何とか団地を立てて、その中に子供たちが生活していくという道路の配置を理想としており、当時の住宅公団の人たちの祈りが込められている。後の永山団地なども盛土や切土をせずに斜面に建っていった。開発は出来るだけ平らにしないとイケないと思っていた近現代の人間に対して、一矢を報いたかった祈りがある。その谷を見てその家が何を思うのか、その谷筋あるいはトップに公園を作って子供たちはどう遊ぶのかというプレイロットも含めて考えてきた都市計画のありようを意味している場所。それを八王子市の人たちが今後どうしていくかは、非常に大きな問題だと思う。
- ・ 甲州街道は、追分から西の方を横断歩道上から見ると真正面に高尾山が見え、高尾山を霊山として崇めていた。都市計画上、高尾山を背骨のような形で置いたのでは思っている。
- ・ そういったストーリーも、歴文構想の中にうまく書き込めると面白いのでは。

3. 閉会

市 今後のスケジュールについて。7月後半の検討会では、歴文構想の素案が主な議題。あわせて、検討会の事前に個別相談することもあるかと思うが、可能な限りご協力いただきたい。9月の検討会では、日本遺産ストーリーの内容に合わせて、半日程度、構成文化財の視察を催したいと考えている。スケジュール案と訪問先は事前に提示する。

以上